

ESPLANADE 192

福岡市美術館 季刊誌

エスプラナード

192号

July, 2018

所蔵品紹介

韋駄天猿猴図

伝・牧谿(13世紀)
絹本墨画
(中央幅)
縦99.2cm 横42.8cm
(左右幅)
縦99.0cm 横41.7cm



九州国立博物館文化交流展示室にて7月16日まで公開中。

【つきなみ講座】

休館中もつきなみ講座は開催中!ただし、会場は福岡市美術館ではありませんのでご注意ください。事前申込不要、参加無料です。受付は開始時刻の30分前からです。

7月21日(土) 15:00~16:00
ニューヨークミュージアム事情vol.2
ニューヨークのミュージアム事情第二弾です。教育活動に焦点をあて、2015年と2017年にニューヨークに調査に行ったその成果をお話します。
鬼本佳代子(当館学芸員)
場所:福岡市博物館 講座室2
定員:30名

8月18日(土) 15:00~16:00
アートクルージング in USA
昨年6月、山口は「村上隆展」を見るためにシカゴを訪問しました。国内では余り知られていない、国際的に活躍する村上隆の話題を中心に、シカゴやニューヨークで見聞きた美術事情をお話します。
山口洋三(当館学芸員)
場所:福岡アジア美術館 あじびホール
定員:50名

9月1日(土) 15:00~16:00
「アフリカンプリント」の歴史と現在
2018年春夏ファッションのトレンドでもある「アフリカンプリント」は、パティックを起源に持つアフリカ版更紗です。実は日本も無関係ではないその歴史や、現代美術における使用など、多方向からこの布に迫ります。
正路佐知子(当館学芸員)
場所:福岡アジア美術館 あじびホール
定員:50名

【編集】浅野佳子(nico edit) 【写真】藤中優介(Calman Inc.) 【印刷】株式会社西日本新聞印刷 【発行】株式会社西日本新聞印刷 【発行】福岡市美術館 | 〒810-0051 福岡市中央区本町公園1-6 | Tel.092-714-6051 | Fax.092-714-6145 | http://www.fukuoka-art-museum.jp/

中央幅に仏教の守護神である韋駄天が、向かって右幅には、岩上につ伏せに眠る猿、向かって左幅には、竹にぶらさがる母子猿が描かれています。筆者と伝えられる牧谿の作品にしばしばみられる、いわゆる「牧谿猿」を左右に配した三幅対ですが、左右の幅は中央の韋駄天図にあわせて画絹を縫い足していることから、本来は別々に制作されたものを三幅対に仕立てたと考えられます。韋駄天は甲冑をまとった武将の姿で描かれます。つりあがった目、短く上を向いた鼻、肉のもりあ

がった頬、何かを囀えているかのごとくに、半開きになった口。髭は髪と渾然一体となって顔から胸を覆っています。ぎょろりと白目を剥いた顔は、武将というより妖怪じみえています。それにもかかわらず、韋駄天の佇まいには、美醜を超えた神秘的な雰囲気が立ち込めています。それは何に起因するのでしょうか。
韋駄天の兜の後ろ半分や、両腕で捧げ持つ宝棒、下半身はほとんど周囲の霧にまぎれて、どんな目をこらしても、全体像をつかむことができま

せん。現実空間のなかに存在するのではなく、まるで、虚空のなかから、ゆらりと顕現したかのような感じです。また、兜の頂上につけられた房は後ろ向きになびいていますが、衣の裾が二本、上に向けて翻っています。白い裳裾が重力に逆らって翻る、非現実的な表現。これこそが、怪異な容貌で周囲を威圧し、邪悪なるものを寄せ付けぬ韋駄天が、仏陀を護る聖なる存在であることを象徴しています。
(学芸課長 岩永悦子)

ただいま リニューアル工事中!

前川建築の代名詞とも言える煉瓦色のタイルは、1250度以上の高温で焼かれた磁器質タイルです。リニューアル工事によって、当館のタイルも一部新調し、張り替えることとなりました。できることなら新築時と同じ土、窯を使ってもう一度製造したいところですが、残念ながら当時のタイル焼成窯は現存しません。そこで、前川園男が目指した風合いを再現するために、昔ながらの窯で瓦を焼いている工場を選びました。



写真は、何度も試作検討を経てようやく完成したタイルを、新築時から使わずに保管されていたタイル、解体工事によってエスプラナードから取り外したタイルと並べ、色彩やテクスチャーが再現できているか見極めているところです。福岡市美術館のタイルは目地を含んで32cm角。当館の展示棟は32m角を基準としており、その100分の1のサイズとして規定されました。これは既製のタイルよりもやや大きいため、特注品となります。数cm大きくなるだけで、製造過程で割れやすくなり反りやすくなるそうです。丁寧な検品を経てここまでたどり着いたタイルは、精鋭タイルと呼んでもいいかもしれません。焼き物特有の風合いとこだわりのサイズに注目しながら、開館後は踏みしめてみてください。

夏休み!こども美術館2018

今年の夏、福岡市科学館とコラボワークショップを行います。昨年のテーマ「布」に続いて今年も、さらにヴァージョンアップ、2種類のワークショップを実施します!その内容は…ひとつは、「色」をテーマに色材制作。もうひとつは「光」をテーマに、構造色を持つものを利用した作品制作です。科学とアートの出会いがどんな体験を生み出しますか?ぜひ参加してみてください!



福岡市科学館とのスペシャル・ワークショップ開催!

場所:福岡市科学館
日程:①色材づくり:8月3日(金)
②光の作品づくり:8月4日(土)
時間:10:00~16:00
対象:小学校3年生~中学生
定員:各回20人
申込方法:往復ハガキメールにて。参加者全員の氏名、年齢(学年)、住所、電話番号、メールアドレス、希望ワークショップの番号をご記入の上、下記までお送りください。
応募先:〒810-0043 福岡市中央区城内2-5 福岡市美術館 夏休み子ども美術館係
もしくは workshop@fukuoka-art-museum.jp
締切:7月20日(金)(必着)。応募多数の場合は抽選します。

作品はどこへ?

福岡市美術館の所蔵品が展覧会、美術館・博物館でご覧になれます。

「モダンアート再訪」ダリ、ウォーホルから草間彌生まで—
福岡市美術館コレクション展」
◎開催中~8月26日(日) 広島市現代美術館
◎9月15日(土)~11月4日(日) 横須賀美術館

九州国立博物館 文化交流展示室
第7室 「古代青銅器のカタチをつつす」 開催中~9月2日(日)
第9室 「高麗と朝鮮の美術」 7月31日(火)~9月2日(日)
第9室 「大和絵の世界」 7月31日(火)~9月2日(日)

福岡市博物館 企画展示室2
市美×市博 黒田資料名品展IX 「黒田家と禪」 7月3日(火)~9月2日(日)
市美×市博 黒田資料名品展X 「黒田家の具足とお守り」 9月4日(火)~11月4日(日)
福岡アジア美術館 アジアギャラリー
「アジアの近現代美術—黎明期から激動の時代へ」 開催中
「サイエンスの眼」 7月12日(木)~10月2日(火)
「横尾忠則とアジア」 9月20日(木)~12月25日(火)

〈ふくおか応援寄付〉

福岡市美術館が魅力的であり続けるためには、今後とも機会あるごとに美術品を収集することが不可欠であり、そのための資金として皆さまから「ふくおか応援寄付」(ふるさと納税による寄付)を募集しています。10万円以上ご寄付いただいた方には、特別企画展開会式の招待状(1年分)を、また、福岡市外にお住まいの方で一定額以上の寄付をされた方には福岡市の特産品をお送りします。
みなさまからの応援をお待ちしています!
問合せ:リニューアル事業課 Tel.092-714-6051

ふくおか応援寄付



福岡市美術館と前川園男

福岡市美術館と前川園男

前川園男(1905-1986)、日本近代建築界の巨匠にして、福岡市美術館の設計を手がけたこの人物をご存じでしょうか?新潟に生まれた前川は高校時代より建築への関心を深め、1925年に東京帝国大学建築学科へ進学。大学2年の頃に、助教授の岸田日出刀(1899-1966)から渡されたのが、後に生涯の師となる建築家ル・コルビュジェ(1887-1965)*の著書でした。これに強く感服された前川は1928年3月、東大を卒業したその日にパリへと旅立ちます。目的はもちろんル・コルビュジェのアトリエを訪れるため。西洋の建築界に新風を巻き起こしつつあった彼のもと、前川は2年間修行に励み、近代建築の原理と理念を学びました。

近代建築とは、一言でまとめらば機能性や合理性を追求した建築のこと。1930年に帰国した後の前川の建築活動は、まさに、この近代建築を日本に根付かせるための取り組みであったと言えます。例えば、建築の構造体をできるだけシンプルで最小限の形とすることで、工業化された素材のみで空間を構成することをテーマとした「テクニカル・アプローチ」は、こうした取り組みのひとつです。一方、機能性や合理性のみを追求することが、建築から人のぬくもりを奪ってしまう危険性ははらんでいることも前川は気づいていました。こうした前川の試行錯誤の成果は、福岡市美術館を含む、1970年代以降の建築にはっきりとあらわれています。蔵かでありながら周囲の環境に調和した外観、

光にあふれ広々とした内部空間は、この時期の前川建築に共通してみられる特徴です。それから、「エスプラナード」についても触れておく必要があるでしょう。エスプラナードとはフランス語で「広場」を意味しており、建物の内外を有機的につなぐ空間として多くの前川建築に採用されています(当館では2階北側入口前に設けられています)。本誌の誌名がこれにちなんでいることはいわずもがな。本誌が読者と美術館との出会いの広場となることを願って、多くの候補の中から選ばれました。福岡市美術館は1979年の開館以来はじめて、長期休館を伴う大規模リニューアルを迎えました。その際、私たちが下した最も重要な決断のひとつが、建替ではなく改修を行うこと、つまり、前川建築の

意匠を継承し次世代へと引き継いでいくということでした。今号のテーマは「前川園男」。福岡市美術館に関わる様々な立場から前川建築について語ります。

*ル・コルビュジェ:本名はシャルル=エドゥアール・ジャヌレ。スイス出身、フランスを中心に活躍した建築家。それまでの西洋建築において主流であった石やレンガではなく、鉄やコンクリートを用いることを提唱。自由な構造を可能にするなど、近代建築に重要な足跡を残した。2016年7月、東京・上野の国立西洋美術館を含む、コルビュジェが世界各地で設計した建築17件が世界遺産に登録されたのは記憶に新しい。国立西洋美術館の実施設計にあたっては、前川園男ら3名の弟子が協力した。

所蔵品紹介 | 夏休み!こども美術館2018 | 作品はどこへ?

私が思う 前川國男

前川國男とはどんな人物だったのでしょうか？

建物の中で働いてきた立場、リニューアルの設計に携わる立場、

開館時に共につくりあげた立場、それぞれの立場から感じた「前川國男」の姿を聞きました。

前川國男は、**ニッポン人である。**

学芸課長 岩永悦子

前川建築の中で働いて30年。内側から使ってみた実感を語りたいと思います。

第一に、バックヤードの使いやすさ。外から入ると展示室にたどり着くまで、延々と歩かれますが、作品保管エリアから裏動線を使って展示室にたどり着くまでの距離の短いこと、まるでマジックのようです。お客様には歩かせて、学芸員にはサービス、というわけではなく、配慮されているのは、あくまで作品。移動距離が最小限になり、安全が確保されます。次に、異文化の融合。1階奥の古美術展示室は、近代美術館として構想されていた建物にじっくりおさまりつつも、「ここは古美術の空間である」という主張を曲げません。襖を大きくしたような引き戸。低い天井。床の間のサイズに近似する、ウォールケース。他の展示室とは異なった思想で設計されたことは歴史としています。美術館に隠された、もうひとつの美術館、といっても過言ではありません。

第三に、見せない遊び心。バックヤードから2階の展示室につながる階段室は、壁一面が目射するような鮮やかな緑色にペイントされています。最初は「階段が蛍光色!？」と衝撃を受けました。シックで重厚な外観を裏切る、跳びぶり。何度通っても、近未来にトリップしそうでくらくらします。

最後に、さりげない贅沢さ。しっくいを磨き上げた階段の手すりも、コンクリートの表面をわざわざ人の手で打ち欠いて作る「はつり壁」も、いまでは考えられないほどの贅沢な仕上げです。一見平凡な床のタイルも、最大3cmもの厚みがある(既製品はその半分)特注品です。一部張り替えの機会に、断面を見ると、焼きたてのブラウンのようなフレッシュさ。感銘を受けました。派手な意匠に走らない、素材を活かした空間づくりと、見えなくとも発揮されるこだわり。粋を演じるのかえって野暮、という美意識に、ニッポン人のよき面を感じずにはいられません。



バックヤードの階段室



タイルの断面

前川國男は、**「永続性を考えた人である。」**

インタビュー

株式会社 梓設計 九州支社 アーキテクト部門 馬場明さん

福岡市美術館のリニューアル事業の設計を担当していました。今回は、以前の建物をできるだけ残しつつ、新たな機能を付け加える方向で設計を進めていました。リニューアルにあたって、前川國男が何を考えて設計をしていたかを追体験すべく書物を読み漁り、実際の細部を詳細に見ていくにつれて、細部に渡って計算し尽くされていることに、改めて驚きました。一例を挙げると、柱などのスパンはすべて3.2mの倍数で構成されています。これは、床に貼られているタイルの10倍のサイズ。よく見ると、一枚のタイルが途中で割られることなくキレイに埋め尽くされていることが分かります。

タイルと言えば、前川建築の特徴のひとつです。今回エスプラナードと呼ばれる外部空間の床タイルは、特注で制作していますが、現在の進んだ技術では、建物全体に雰囲気を出している独特の色ムラが、逆に再現できないことが分かりました。東京の前川建築設計事務所の所長にも見ていただきながら、土を変えたり、素材の混合比を変えたりして苦労して焼き上げています。それ以外にも、家具や照明に至るまで「前川だったらどう作るだろう?」という視点で考えています。リニューアルというのは、変えるべきことがあって行うものです。ですが、闇雲に新しくすればよいというものではありません。特に今回は、前川建築の本質を理解することが、新しい部分の設計を行う上で最も重要なことだと考えました。その本質のひとつが、前川建築は、土や鉄など自然に近い、いわば本物の材料をベースに使われていることだと考えました。だからこそ前川建築は、時間が経つごとに趣きが増すのです。時を経て趣きが増した空間と、新しくした部分の調和をいかに図るかが、今回の設計で難しかったこと



柱とタイルが並ぶ1階ロビー

前川國男は、**「美術館建築のフロントランナーである。」**

インタビュー

福岡市文化政策(美術部門)アドバイザー、元・福岡市美術館副館長 安永幸一さん

福岡市美術館の開館に、第一号の学芸員として携わりました。新しい美術館を一から立ち上げるのは、心躍る仕事です。福岡市美術館は延床面積が1万㎡以上の大きくなる予定だったので、「大型文化施設設計の実績のある人をピックアップせよ」との指示に従って、1ヵ月かけて200人ほどの建築家をリストアップ。私たち準備室の人間は、線に映えるレンガが美しい埼玉県立博物館や熊本県立美術館を見ていたので、大濠公園にふさわしい美術館のイメージが湧き、前川國男を強く推したのを覚えています。いざ決定すると、「[はたして有名な建築家は、私たちの希望を聞き入れてくれるのだろうか]という心配がありました。待望の美術館ですから、多くの市民に愛されるものになりたい。私たち学芸員は展示室や収蔵庫の広さ、人の動線などについて一生懸命考えて希望を箇条書きにし、前川國男建築設計事務所に渡しました。すると意外にも、いろいろ考えを取り入れてくれました。さらに持ち上がった難題は、近代の作品を扱う美術館として計画していたところに、思いがけず黒田資料という凄く古美術がいきなり寄贈されることになったこと。近代美術館構想の中で古美術の黒田資料をどう配置するか?と侃々諤々やりあいました。半年ほど検討した結果、前川の出した答えは「本館は2階、別館として1階をあて、そこに黒田資料を展示する」という苦肉の策でした。そのため、出入口が2つ作られました。大濠公園から緩やかに2階につながるアプローチがメインの入口というもの。ここから福岡市美術館のデザイン上の大きな特徴であるエスプラナード(広場)が生まれたのです。前川建築の特徴をよく表す象徴的な場所になりました。



新築工事の様子 提供:西日本新聞社

前川は、ル・コルビュジェの弟子でしたから、彼と通じる思想が設計に取り入れられています。大きな特徴

は、外光を取り入れて、建物の外と内につながりを持たせるといったコンセプト。その考えに導かれて、展示室には窓と天窗が設けられました。実は学芸員的には、自然光と人工光という性格の異なる光を操るのは大変なのですが、ここは前川にとっても譲れない考えだったようです。

もうひとつ、前川はレストランを大切にしました。今こそ当たり前になりましたが、当時、美術館の一番いい場所にレストランを持つってなんているのは、画期的なアイデアでした。同じく前川設計の東京都美術館のレストランには、おいしいと評判のハヤシライスがあります。今回のリニューアルでレストランも一新されますが、福岡市美術館でもなにか名メニューが生まれるといいですね。開設準備室時代から、できあがるまで5年を費やした美術館です。前川イズムをいかに継承して、どんな新しい風を入れた美術館になるのか、いまから楽しみです。

いま会いに行ける前川建築

多くの文化施設や型建築を手がけた前川國男。彼の建築のフィロソフィーが感じられる建物は日本全国にあります。2017年には、前川建築の魅力を多くの方に知って頂くため福岡市を含む8つの自治体によって近代建築ツアーリズムネットワーク(https://www.city.fukuoka.ac.jp/join/ou/kekaku/main.htm)が設立されました。ここにはその中から美術館・博物館をピックアップ。



埼玉県立歴史と民俗の博物館 (竣工当時:埼玉県立博物館) 1971年開館 | 埼玉県さいたま市大宮区高鼻町4-219 | 電話:048-645-8171(学芸)、048-641-0890(管理) | http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/



東京都美術館 1926年開館(前川が手がけた現在の建物は1975年竣工) | 東京都台東区上野公園8-36 | 電話:03-3823-6921 | http://www.tobikan.jp/



熊本県立美術館 1976年開館 | 熊本県熊本市中央区二の丸2 | 電話:096-352-2111 | http://www.museum.pref.kumamoto.jp/



新潟市美術館 1985年開館 | 新潟県新潟市中央区西大畑町5191-9 | 電話:025-223-1622 | http://www.ncam.jp/



去る5月12日、国立民族学博物館(以下みんぱく)の吉田憲司館長を招き、福岡市科学館で講演会&座談会を開催しました。福岡市美術館では、2016年よりミュージアムウィークの時期に、リニューアル後の姿を展望するフォーラム・講演会を開催しています。3回目となる今回は、いわばその締めくくりと言える内容でした。まずは前半、吉田氏の講演会冒頭で語られたのは、「国際博物館の日」*の世界テーマ「Hyperconnected museums: New approaches, new publics (新たな博物館のつながり-新たなアプローチ、新たな出会い-)」でした。これを、吉田氏は「博物館を通じて人と人とのこれまでにならぬつながり」と解釈し、近代博物館の誕生以来変化し続ける、博物館と人々との関係を、歴史を紐解きながら語られました。その中でキーワードとなったのが「フォーラムとしてのミュージアム」です。吉田氏は、これまで博物館・美術館は、それぞれの立場から「モノ」に新しい意味を付け加え、一方的に人々に提示してきた。しかし、今、博物館・美術館は、フォーラム、つまりそこで人とモノ、人と人が出会い、そこから新たな議論や挑戦が生まれていく広場のような役割を果たしつつある。人々が博物館・美術館を通じて社会を作り上げる動きが起こってきている、といいます。その動きを、オリンピックを機に起こった民族展示への抗議、収蔵物として納められている遺骸の返還などの動きや、地域のリサーチという民族誌的な手法を使って作品を制作するアーティストの存在、という例を引きながら語られました。そしてこの動きはますます進むだろうと言

葉で講演会は締めくくられました。後半の座談会では、吉田氏に加え、福岡市科学館の運営を担う民間企業サイエンス&クリエイティブ代表取締役の山村健一郎氏、そして当館の錦織亮介館長が登壇し、前半の講演会を受けて、社会・地域・人々とミュージアムの関係について意見が交わされました。山村氏は、モノのない科学館だからこそ、地域の科学者との協力や、子ども達を育てることなど、科学を通した人々の交流、育成を目指していると述べ、錦織館長は、利用者個人に注目し、美術館にはモノと向き合うことで自分と向き合う、個人の心の自由を保障するという重要な役割があると述べ、それぞれがミュージアムの社会的役割について語りました。講演会&座談会から見えてきたのは、ミュージアムが社会と密接につながっているということ、そのことを意識しながら利用者に真剣に向き合うことの必要性でした。しかし、そのためには学芸員はもとより運営に関わるあらゆる人々の努力が不可欠だと感じました。リニューアルに向けて気持ちを新たに3時間で。

*国際博物館の日:5月18日。世界141の国と地域の博物館専門家が参加する国際博物館会議が、博物館が社会に果たす役割をアピールするために1977年に定めた。